高齢地域住民の認知症に対する意識について

◎片山 雅史[1)]
純真学園大学[1)]

【はじめに】地域自治体主催による認知症関連の講演会を実施し、その後のアンケート結果をもとに、高齢者の認知症に対する意識と現状を調査した。

【対象および方法】講演は「認知症の予防～認知症を知ることから始めよう～」というタイトルで、福岡市南区内に居住する団体より要請を受けて 2 回実施した。講演内容は「認知症の概要」「認知症の検査」「認知症の予防」である。講演終了後に選択肢および自由記載の形式でアンケートを実施し、回答を分析検討した。受講者は平均年齢 81 歳（69～93 歳）31 名で、認知症に関する知識や不安の程度、地域で認知症患者の受け入れについての考えなどの記載を依頼した。受講者内に現在認知症と診断されている者はいなかった。アンケート結果は、先に実施した大学生向けの講演後アンケートと比較し、年代による意識の違いを中心に考察する。本研究では個人を特定できる情報を排除し、受講者本人に不利益にならないよう配慮した。

【結果】認知症に対する不安度について、不安に思っていないという回答が、大学生では皆無であったのに対し、高齢者では約 1/3 で「心配していない」との回答があった。対象が高齢者であったこともあり、その家族も高齢であることが予測され、配偶者や兄弟など家族が「認知症と診断された」「認知症が疑わしい」との回答が 13 件であった。疑わしい理由として、「物忘れが多い」、「曜日、時間がわからない」、「迷子になった」および「何度も同じことを言う、聞く」が多く、一般的に認知されている症状とほぼ一致していた。講演後の感想および認知症についての自由記載した文章の AI 分析では、自身が認知症を心配していないとした参加者の回答で、質問と合致していない、文脈・品詞が乱れている、などが指摘されていた。

【考察】高齢者は自身や家族の認知症に対して無関心や無自覚な傾向があると考えられる。また、文章表現と認知機能には関連性がある可能性が示唆された。今後、講演会実施時に神経心理学的検査かそれに準ずる簡易検査を実施することで、文章表現と認知機能の関係を見いだせる可能性があると考える。

連絡先 092(554)1255